

聖週の始まりの日曜日、この日は棕櫚の日曜日と呼ばれます。主イエスは用意しておいたロバの子に乗ってエルサレムに入ってきました。民衆は棕櫚の葉を手に持ち、ホサナホサナと迎えました。この風景から、誰が金曜日の十字架の出来事を想像することが出来たでしょうか？。主イエスはエルサレムから3 kmほど戻ったところにある、ベタニヤの村に宿舎を定め、弟子たちと共にベタニヤに行かれました。

エルサレムにいた人々の心はどのような状態だったのでしょうか？。主イエスはどのように十字架につかねばならなかったのでしょうか。主イエスは誰のために十字架につかれたのでしょうか？。皆様とご一緒に黙想していきたいと思えます。

翌日の月曜日、主イエスは弟子たちと共にエルサレムに来られました。主イエスの目に神殿で商売をしている人たちが入りました。神殿で通用する通貨は決められておりました。また犠牲としてささげられるハトは傷のないものでなければなりません。神殿に礼拝に来る人のため、たくさんの商売人たちが店を開いておりました。ところが商人たちは、両替に法外な手数料を取ったり、ハトの値段を神殿の外の20倍近くにしたりして私腹を肥やしていたのです。ヨハネによる福音書には次のように書かれています。『イエスは縄で鞭を作り、羊や牛をすべて境内から追い出し、両替人の金をまき散らし、その台を倒し、鳩を売る者たちに言われた。「このような物はここから運び出せ。わたしの父の家を商売の家としてはならない』。このような激しい主イエスの姿は聖書にそう多く出てはきません。

主イエスによる宮清めと呼ばれるこの出来事は、エルサレムに住む人々にざわめきと不安をもたらせ、商売人たちから主イエスは大きな恨みを持たれることになりました。このことからこの日を「不安の月曜日」と呼んでいます。主イエスと弟子たちはベタニヤに行き、泊まりました。

翌日の火曜日、主イエスがエルサレムに来ると、そこに待ちうけていたのは祭司長や民の長老たちでした。彼らはこれまで幾度となく主イエスと議論して敗北していました。そして今回が最後の議論の場となりました。

「何の権威でこのようなことをしているのか」と意気込む彼らに、主イエスは「ヨハネの洗礼はどこからのものだったか。天からのものか、それとも、人からのものか」と尋ねられました。天からのものだったとすれば、主イエスはどのようにしてヨハネを信じなかったのかというだろう。人からのものだと言えば民衆が納得しない。彼らにとって答えられない主イエスの挑戦でした。

主イエスはさらに、ぶどう園のたとえ、披露宴のたとえ話をされ、ユダヤ人が主なる神に従おうとせず、罪を犯しつづけていることを示されました。

ファリサイ派の人々は出て行って、どのようにしてイエスの言葉じりをとらえて、畏にかけようかと相談し、「皇帝に税金を納めるのは、律法に適っているでしょうか、適っていないでしょうか」と質問しました。主イエスは「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい」と、これまた完璧な答えをされ、彼らは返す言葉がありませんでした。

さらに復活はないと言っているサドカイ派の人々は、「わたしたちのところに、七人の兄弟がいました。長男は妻を迎えましたが死に、跡継ぎがなかったので、その妻を弟に残しました。次男も三男も、ついに七人とも同じようになりました。最後にその女も死にました。すると復活の時、その女は七人のうちのだれの妻になるのでしょうか。皆その女を妻にしたのです」と質問しました。主イエスは、天国ではめとったり嫁いだりすることはなく、結婚はこの世の生きた人間のため、人間が罪を犯す前に神の定めた尊いことであることを示されました。

主イエスの議論は、彼らを打ち負かすのが目的だったのではなく、悔い改めへの招き、

そして天国への招きでした。彼らは主イエスのこの招きを受け入れるべきでした。しかし聖書には、「祭司長たちや民の長老たちは、カイアファという大祭司の屋敷に集まり、計略を用いてイエスを捕らえ、殺そうと相談した」と書かれています。

主イエスが激しい議論をされたこの日を「議論の火曜日」と呼んでいます。主イエスは律法学者、祭司長、ファリサイ派の人々の恨みを一身に背負うことになったのです。

夕方になり、主イエスと弟子たちはベタニヤに行かれ、泊まりました。

翌日の水曜日、主イエスは一日エルサレムには行かれませんでした。ベタニヤで静かに黙想をしておられました。次にエルサレムへ上った自分を待っているのは十字架であることを主イエスはもちろん御存知でした。思えば主イエスは、どのような時でも祈りをなさらなかったことはなく、特に大きな業を行われた後は、必ず寂しい場所に一人退いて祈っておられました。

この日を「黙想の水曜日」と呼んでいます。

翌日の木曜日、弟子たちと共に一日を過ごされた主イエスは、夕刻、後にマルコによる福音書を記すことになる聖マルコの家の一階で、最後の食事をなさいました。一同が食事をしている時、主イエスはパンを取り、感謝してこれを裂き、弟子たちに「これは私の体である」と与えられました。また食事の後、ぶどう酒の入った杯を取り、同じように感謝してから弟子たちに、「皆この杯から飲みなさい。これは新約の私の血であって、罪を赦すため、あなたがたおよび多くの人のために流すものである」と言われました。こうして主イエスは聖餐式をお定めになりました。そして主イエスは、再びこの世に来るまで、常にこれを行いなさいと命じられました。私たちの教会ではこの主イエスの命令を忠実に守り、主日毎に聖餐式を行うのを原則にしているのです。

このことからこの日を、「聖餐制定の木曜日」と呼んでいます。

食事をしている際、主イエスの心はおだやかではありませんでした。弟子の一人であるイスカリオテのユダが自分を裏切ることが御存知だったのです。主イエスは弟子たちに、あなたがたの一人が私を裏切ろうとしていると伝えます。一同は騒然となりました。マタイによる福音書によれば、『ユダが「先生、まさかわたしのことでは」と言うと、イエスは言われた。「それはあなたの言ったことだ』と、はっきりそれがユダであると言っていますし、ヨハネによる福音書では『「わたしがパン切れを浸して与えるのがその人だ」と答えられた。それから、パン切れを浸して取り、イスカリオテのシモンの子ユダにお与えになった。ユダがパン切れを受け取ると、サタンが彼の中に入った…』と劇的に犯人がユダであることが描かれています。果してユダは裏切るためにマルコの家を後にし、一隊の兵士と、祭司長たちやファリサイ派の人々の遣わした下役たちが集まっているところへ出ていきました。しかし弟子たちはそれが何のことかわかりませんでした。

食事を終えた後、主イエスと弟子たちはゲッセマネの園と呼ばれるところへやってきました。主イエスは祈るため、ここへよく来ておられたのです。弟子たちも一緒に来ていたので、主イエスを裏切ったユダも、ここをよく知っていました。

「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願いどおりではなく、御心のままに。」主イエスは激しく祈られました。主イエスの心にまるで気づかないかのように、弟子たちは眠ってしまいました。主イエスは弟子たちに目を覚ましてるように言われ、再び祈られました。戻ってくると弟子たちはまた寝ていました。同じことを繰り返して主イエスが祈りの後に帰ってきたとき、弟子たちはまた眠ってしまいました。

「あなたがたはまだ眠っている。休んでいる。時が近づいた。人の子は罪人たちの手に引き渡される。立て、行こう。見よ、わたしを裏切る者が来た。」イエスがまだ話しておられると、十二人の一人であるユダがやって来た。祭司長たちや民の長老たちの遣わした大勢の群衆も、剣や棒を持って一緒に来た。イエスを裏切ろうとしていたユダは、「わたしが接吻するのが、その人だ。それを捕まえろ」と、前もって合図を決めていた。ユダはすぐイエスに近寄り、「先生、こんばんは」と言って接吻した。人々は進み寄り、イエスに手をかけて捕らえたのでした。

3年間共に行動していたユダに裏切られた主イエスは、無念でいっぱいだったことでしょう。弟子たちも皆主イエスを見捨てて逃げ去ってしまい。唯一主イエスのもとへやってきたペテロも、鶏が鳴く前に、3度主イエスを知らないと言ってしまうのです。

主イエスは大祭司を議長とするユダヤの最高法院で裁判にかけられ、神を冒瀆したと決めつけられ死刑にすべきだと判断されてしまいます。しかしユダヤは当時、ローマ帝国によって属州支配されており、死刑の権限を与えられていませんでした。そこで彼らは、死刑の権限を持つローマ総督ポンテオ・ピラトのところへ主イエスを連れて行きました。このポンテオ・ピラトという人はわたしたちが礼拝のニケヤ信経や使徒信経を用いる際出てくる名前の人で、ローマから派遣されたこの地方の責任者でした。パレスチナ地域は争いの多い地域だったため、ローマ帝国は軍隊を常駐させてローマ皇帝の直属配下にしていました。ピラトは26年頃から35年頃まで第5代総督として任務につきましたが、パレスチナに派遣されていたことから優秀な人材であったと言われています。

しかしピラトの支配は順調ではありませんでした。エルサレムへの水道工事を行った際の資金調達など、ピラトは大きく3つの政治的失敗をしていました。ピラトはこのような背景を持ちながら、主イエスの裁判に臨んだのです。

「どういう罪でこの男を訴えるのか」と尋ねるピラトに人々は、「この男が悪いことをしていなかったら、あなたに引き渡しはしなかったでしょう」と、とにかく自分たちが主イエスを引き渡したことを正当化しようとしていました。ピラトはまず、この訴えはユダヤの宗教的な理由によるものと判断し、「あなたたちが引き取って、自分たちの律法に従って裁け」と言いましたが、主イエスへの人々のねたみは頂点に達していました。人々を動かしていたのは、これまで幾度となく主イエスから批判され、偽善をあらわにされた人々でした。最初彼らは主イエスを殺そうとまでは思っていませんでしたが、回数を重ねるに連れ、また時間が経過するに連れ、そのねたみが彼らのなかでどんどん大きくなってきてしまいました。そして先ほども見てきた通り、主イエスを殺そうと考えるようになってきたのです。悔い改めるより、自分の誤りを認めようとせず主イエスさえいなければと彼らは考えたのでした。

人々はピラトが自分たちの律法で裁くようにとの要求を拒否しました。主イエスは死なねばならない。自分たちはそれを行う権限を与えられていないというわけです。ローマはユダヤを支配するに際し、死刑の権限をユダヤ人には与えていないではないかというわけです。だから裁きはピラトがせねばならないと主張したのです。

しかしピラトは、主イエスを彼らが訴えたのはねたみのためであったことがわかっており、死刑にする必要はないと判断していました。民衆にその判断を受け入れさせるために、ピラトはいくつかの取引を考えました。

最初は、恒例になっているいわゆる恩赦でした。過越祭にはだれか一人罪人を赦すことになっていたのです。これはユダヤ人から求められたものでしたので、ピラトはあなたたちからいつも求められている恩赦を、今回は主イエスに適用しようと言ったわけです。ユダヤ人たちがいつも要求していることであるし、恩赦を行うか行わないか、あるいは誰を赦すかはピラトの手に委ねられているわけですので、文句はないだろうと考えたのです。

ところが人々は意外にも、強盗と殺人で捕まえられていたバラバを赦すように要求してきました。本来ならば恩赦を願うような人ではない、自分たちに大きな危害と不安をもたらした人でしたが、主イエスへのねたみが通常心を失わせていたのです。この答えにピラトは驚き、次の取引を考えねばなりませんでした。

次は、主イエスを鞭で39回打たせるというものでした。ピラトの目には主イエスに罪がないのは明らかでしたが、民衆を満足させなければ自分の判断は受け入れられないからです。39回の鞭は大変な苦痛であり、時には命を奪われるケースもあったようです。ピラトはあえて主イエスを鞭で打たせました。そして主イエスを人々の前に引き出したのでした。

しかしピラトの考えも届かず、人々は主イエスに対し、「十字架につけろ。十字架につけろ」と叫びました。そして主イエスが神の子と自称していたと訴えました。ローマ帝国では、皇帝が神であると考えられていました。ピラトにとってこの答えは、主イエスが皇帝の子であると言っていることを意味しました。ピラトがこの答えを聞いて恐れたのは当然のことでした。

ピラトは、今度は主イエスに自分が主イエスを赦すことも死刑にすることも出来る者であることを示し、主イエスより上の権限を持っていることを誇示しますが、主イエスの真理を前に、自分の敗北を認めざるを得ませんでした。

ピラトは最後まで主イエスを赦そうと努めましたが、ユダヤ人たちから「もし、この男を釈放するなら、あなたは皇帝の友ではない。王と自称する者は皆、皇帝に背いています」と呆然となりました。これはピラトへの脅迫の言葉だったからです。あなたはこれまで何回も皇帝の期待に背き、失敗を重ねたではないか。今回もまた皇帝に背くつもりなのかというわけです。主イエスへのねたみの心はついに、ピラトへの脅迫へと発展したのでした。こうしてピラトは主イエスをガバタ、すなわち「敷石」という場所で、裁判の席に着かせたのでした。

人々の声は一段と高まりました。「殺せ。殺せ。十字架につけろ」、そしてついにピラトは決定的な言葉をユダヤ人たちから聞くこととなります。「わたしたちには、皇帝のほかに王はありません」。ユダヤ人たちはこれまで、皇帝をユダヤの王と認めたことはありませんでした。いわばローマに魂を売り渡すような言葉を、しかし主イエスを殺すためならば平気で発するようになっていたのです。もしこのユダヤ人たちと自分が敵対すれば、ローマ帝国から統率能力のない総督と判断され、更迭されてしまうことになるでしょう。優秀な手腕を信頼されて、ユダヤの地に総督として任命されていたピラトにとって屈辱でした。そしてついにピラトは主イエスを十字架につける決定をくだしたのです。

ピラトは主イエスに罪がないことを認めながらも、ローマに死刑の権限が握られているのを逆に利用され、取引に失敗し、最終的にはユダヤ人から脅迫され、自分たちこそがロー

マへの忠実な者であり、ピラトはそうではないとまで言われ、ついに主イエスを十字架につけてしまったのです。正義よりも自らの保身を、最終的には自己中心の自分に打ち勝つことの出来なかった姿が描かれています。

そして主イエスの十字架から数年後、ピラトはサマリヤで発生した暴動を、残忍な多数の死刑をもって鎮圧したことがローマ皇帝の耳に入り、ついに総督の座を追われることになりました。

すなわち主イエスを十字架につけたのは、お金に目がくらみ、心にサタンが入ってしまったユダ、ねたみをおこしていたファリサイ人であり、自分の地位に固執したピラトであり、しいては私達人間の持つ不自由さと罪の存在が主イエスを十字架につけたのです。

主イエスが十字架上で言われた言葉は七つあります。

そのとき、イエスは言われた。「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのかわからないのです。」

イエスは、母とそのそばにいる愛する弟子とを見て、母に、「婦人よ、御覧なさい。あなたの子です」と言われた。それから弟子に言われた。「見なさい。あなたの母です。」

するとイエスは、「はっきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」と言われた。

三時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。

この後、イエスは、すべてのことが今や成し遂げられたのを知り、「渇く」と言われた。

イエスは、このぶどう酒を受けると、「成し遂げられた」と言い、頭を垂れて息を引き取られた。

イエスは大声で叫ばれた。「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」こう言って息を引き取られた。

この七つの御言葉は大変味わい深いものであり、一つ一つ黙想しながら主イエスの三時間の苦しみを考えるのが古来の習慣であります。本年は著者が最も言いたかったことだけ心に留めて、一言ずつ短い黙想をはさみながら御言葉に聞いていきたいと思えます。

そのとき、イエスは言われた。「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのかわからないのです。」人々はくじを引いて、イエスの服を分け合った。民衆は立って見つめていた。議員たちも、あざ笑って言った。「他人を救ったのだ。もし神からのメシアで、選ばれた者なら、自分を救うがよい。」

主イエスを十字架につけた人々は皆、主イエスを侮辱しあざけていました。しかし主イエスはその前の裁判の記事で明らかのように、このような苦しみに合わなければならないようなことは何一つなかったのです。来たるべき日に主なる神から彼らに下される審きは何と大きく恐ろしいことでしょう。主イエスが祈られたのはこういう人々のためでした。主イエスはその伝道生涯の中で許すということを徹底的に教えられました。あなたに対して罪を犯すものがいたならば、何度でも許してあげなさい、何回でも何回でも私があなたがたにしたように何度でも許しなさい。主イエスは十字架においてもそのことを教えられたのでした。

イエスは、母とそのそばにいる愛する弟子とを見て、母に、「婦人よ、御覧なさい。あなたの子です」と言われた。それから弟子に言われた。「見なさい。あなたの母です。」

主イエスの十字架のもとには、主イエスの母であるマリヤと主イエスから愛されていたマグダラのマリヤがおりました。さらにそこには主イエスの弟子の一人であったヨハネが

おりました。主イエスは十字架につけられる前着ていたものをはぎ取られ、それはくじびきされて分けられました。この着物をつくったのは母マリヤでした。それをはぎとられ、裂かれてくじびきにされたのを見て、母マリヤはどんな気持ちだったことでしょうか。主イエスはその母に、天国の家族、神の家族を示されたのです。主イエスは伝道を開始されてからは母マリヤを母とは呼ばずに「婦人よ」と呼んでおりました。あのカナの婚礼に招かれたとき、主イエスは母マリヤに「婦人よ、わたしとどんなかかわりがあるのです。わたしの時はまだ来ていません。」と言ったことがありました。主イエスは全ての人々が主なる神のもとに天国において神の家族として結ばれている、血縁を超えた神の家族が天国に用意されていると言われたのでした。十字架の苦しみにあっても母マリヤの苦悩を覚えられた主イエスはそれだけでなく天国における神の家族を示されたのでした。

するとイエスは、「はっきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に樂園にいる」と言われた。

この言葉は、主イエスと共に十字架につけられた強盗の一人に向けて発せられた言葉です。群衆と一緒に主イエスを罵っていた一人の強盗をもうひとりがたしなめていたのです。「イエスよ、あなたの御国においてになるときは、わたしを思い出してください」と言った強盗に対して、主イエスは天国への約束をお与えになったのです。十字架刑は当時最も重い罪を犯した人に対して行われる刑罰でした。すなわちこの強盗たちはこの世では許されることのない、最も重い刑罰をもって自分の行いを命をもって償ってもらえない人達だったのです。しかし主イエスはこの悔い改めの言葉を聞かれてこの人に天国の約束をお与えになったのです。同じルカによる福音書には放蕩息子の話が出てまいります。放蕩に身を持ち崩した息子が我にかえって戻ってきたとき、父親は彼を何も言わずに喜んで迎えたのでした。この父親が主なる神を現しているのは明らかです。悔い改めて主なる神のもとに戻ってくる人を主なる神はかならず迎え入れてくださり、それを待ち望んでおられるのです。当時の人々に与えられていたのは旧約の約束でした。そこに描かれているのは厳しい主なる神の姿であり、自分の罪は自分で償わなければなりません。主イエスはそこへ悔い改めるものを主なる神はけっして見捨てられないことを教えられたのです。しかも私達人間の常識を超えて愛をもってはっきりとお示しになったのです。

三時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。

主イエスが十字架につけられたのは昼の十二時頃でした。三時間が過ぎ、主イエスの苦しみもいよいよ限界に達していたのです。自分の心のままにではなく、すべて主なる神の御心のままにと歩んできた主イエスに最後に与えられたのがこの十字架だったのです。その事実が主イエスにこの言葉を言わせたのでしょう。胸をかきむしられるような激しい言葉です。人々は主イエスに何度も自分を救ってみろと言っていました。他人を救ったのだから自分も救ってみろというわけなのです。もちろん主イエスは十字架からおりることはできたに違いありません。もしそうすれば人々もあるいは主イエスを信じたかも知れません。しかし主イエスはおりてこられませんでした。それは主なる神から与えられた使命を前に主イエスは十字架からおりるわけにはいきませんでした。世の全ての人を救うために、主イエスはご自分の苦しみを遠ざけることは出来なかったのです。そしてもう一つ、主イエスは大変苦しんでおられましたが、主なる神もまた大変苦しんでおられたのです。愛する子えある主イエスが今にも息を引き取ろうとする時、世の人を救うご決断をなさった主なる神も大変苦しんでおられました。人間の罪の大きさと主なる神の愛の深さを感じさせる瞬間です。

主イエスはその生涯の中でご自分のために天国の力を用いられたことは一度もありません。

んでした。それは私達が苦しいとき、どうしてよいか分からないとき、主なる神にのみ寄り頼むことを私達に示すためでした。主イエス御自身がその模範を私達に示してくださったのです。

この後、イエスは、すべてのことが今や成し遂げられたのを知り、「渴く」と言われた。

主イエスの十字架上の言葉ではどれも、私達人間では到底口にする事の出来ないことですが、ただ一つ私達でもよくわかる、口にすることが出来る言葉がこの言葉です。他の言葉だけでしたならば、主イエスはもしかして十字架は苦しみではなかったのではないかとも思えますが、この言葉はそれをはっきりと否定し、主イエスが私達人間と同じ肉体的な苦しみを味わっておられたのだと言っておられます。十字架はさきほども見ましたように極悪人に対する刑罰ですが、これは大変に残酷な刑罰でした。刑を受けるものは十字架に釘で打ち付けられますが、それは致命傷にならないように打つことになっていました。そして死ぬまで放置されるのです。従って刑を受けるものは飢えと乾きが最もつらいものであり、十字架刑が残酷だと言われるのは飢えと乾きの戦いをさせているのです。飢えて食べることが出来ないとき、乾いても何も飲むことが出来ないとき、私達が感じる苦しみを思い起こしてみましよう。

「成し遂げられた」

主なる神によって始められた救いの業が完成したとの勝利の言葉です。救い主としての使命を主イエスは立派に果たされたのでした。この主イエスの救い主の姿は、イザヤ書に示されておりました。

見よ、わたしの僕は栄える。はるかに高く上げられ、あがめられる。かつて多くの人をおののかせたあなたの姿のように、彼の姿は損なわれ、人とは見えず、もはや人の子の面影はない。それほどに、彼は多くの民を驚かせる。彼を見て、王たちも口を閉ざす。だれも物語らなかつたことを見、一度も聞かされなかつたことを悟ったからだ。わたしたちの聞いたことを、誰が信じえようか。主は御腕の力を誰に示されたことがあるだろうか。乾いた地に埋もれた根から生え出た若枝のように、この人は主の前に育つた。見るべき面影はなく、輝かしい風格も、好ましい容姿もない。彼は軽蔑され、人々に見捨てられ、多くの痛みを負い、病を知っている。彼はわたしたちに顔を隠し、わたしたちは彼を軽蔑し、無視していた。彼が担ったのはわたしたちの病、彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに、わたしたちは思っていた、神の手にかかり、打たれたから、彼は苦しんでいるのだと、と。彼が刺し貫かれたのは、わたしたちの背きのためであり、彼が打ち砕かれたのは、わたしたちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによってわたしたちに平和が与えられ、彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。わたしたちは羊の群れ、道を誤り、それぞれの方角に向かって行った。そのわたしたちの罪をすべて主は彼に負わせられた。苦役を課せられて、かがみ込み、彼は口を開かなかつた。屠り場に引かれる小羊のように、毛を切る者の前に物を言わない羊のように、彼は口を開かなかつた。捕らえられ、裁きを受けて、彼は命を取られた。彼の時代の誰が思い巡らしたであろうか、わたしの民の背きのゆえに、彼が神の手にかかり、命ある者の地から断たれたことを。彼は不法を働かず、その口に偽りもなかつたのに、その墓は神に逆らう者と共にされ、富める者と共に葬られた。病に苦しむこの人を打ち砕こうと主は望まれ、彼は自らを償いの献げ物とした。彼は、子孫が末永く続くのを見る。主の望まれることは彼の手によって成し遂げられる。彼は自らの苦しみの実りを見、それを知って満足する。わたしの僕は、多くの人々が正しい者とされるために、彼らの罪を自ら負った。それゆえ、わたしは多くの人を彼の取り分とし、彼は戦利品としておびたしい人を受ける。彼が自らをなげうち、死んで、罪人のひとりに数えられたからだ。多くの人々の過ちを担い、背いた者のために執り成しをしたのは、この

人であった。

政治的支配者ではなく、権力者でもなく、ただ人々の罪を負い、死なれた救い主、そして天国の約束を与えてくださった主イエスだったのです。

「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」

十字架は残酷な刑罰です。多くの場合、受刑者はその苦しみのあまり気が狂わんばかりになって、三日か四日後に死んでいきました。しかしこの主イエスの言葉は大変に安らかさに満ちております。それもそのはずでこの言葉は当時の社会で就寝前の挨拶の言葉として用いられていたのです。すなわち主イエスは「おやすみなさい」と言って息を引き取られたということなのです。その言葉が人々の心にどのように響いたか、この言葉を福音書に記したルカは次に葉に記しています。

百人隊長はこの出来事を見て、「本当に、この人は正しい人だった」と言って、神を賛美した。見物に集まっていた群衆も皆、これらの出来事を見て、胸を打ちながら帰って行った。イエスを知っていたすべての人たちと、ガリラヤから従って来た婦人たちとは遠くに立って、これらのことを見ていた。

主イエスの平安に満ちた姿は、それまで十字架につけろと叫んでいた人々だけでなく、またキリストに触れたことのないローマの兵隊でさえ、主イエスの姿をみて神の子と告白したのでした。何の説明も説得もない、主イエスの平安に満ちた姿が人々の心にしみていったのでした。その姿がこれらの多くの人々の心を変えさせたのでした。この姿はまさに殉教であり、多くの人々がキリストに降参した証しなのです。私達は主イエスより示された姿を大切に、聖餐式の度に「主の平和」と挨拶をかわします。この平和は主イエスがこのときに示してくださった姿そのものです。十字架につけられた主イエスはこの世での生涯を終え、静かに眠りにつかれました。主なる神によって与えられる平安と、主なる神にのみ従っていく信仰生活、主イエスが最後に示してくださったのはこの姿だったのです。

本年はコロナウイルス拡大のため、礼拝堂で皆様とご一緒に黙想しながらの礼拝が出来ず、このようにそれぞれの場で黙想をしていただきながらみ言葉に耳を傾ける形になりましたが、主イエスの贖いの業への感謝と私たちへの愛は変わることがありません。おそらく本年は私たち教会の歩みの中で、困難に満ちた年として長く語り継がれ、覚えられていくことでしょう。その中で示された主なる神の愛を、しっかりと心に刻みましょう。